

**ネット依存傾向からの脱却支援のための教育的アプローチ—信頼関係構築及び環境調整の重要性**

実践報告論文『ネット・ゲーム依存傾向が一つの要因で不登校になったAへの支援記録と考察～精神科医小林桜児の「信頼障害仮説」を踏まえて』（会誌『技術教育研究』2020年10月）の概要紹介

全文 URL [https://www.hiro-univ-netpat-](https://www.hiro-univ-netpat-otani.com/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E6%88%90%E6%9E%9C%E5%A0%B1%E5%91%8A/3-%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%AA%8C%E5%B9%B4%E5%A0%B12020%E5%B9%B4/L)

[otani.com/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E6%88%90%E6%9E%9C%E5%A0%B1%E5%91%8A/3-%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%AA%8C%E5%B9%B4%E5%A0%B12020%E5%B9%B4/L](https://www.hiro-univ-netpat-otani.com/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E6%88%90%E6%9E%9C%E5%A0%B1%E5%91%8A/3-%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%AA%8C%E5%B9%B4%E5%A0%B12020%E5%B9%B4/L)

本実践報告は、筆者が2年間学級担任として受け持ったネット・ゲーム依存傾向が一つの要因で不登校になった生徒Aへの支援記録をベースに、ネット・ゲーム依存傾向からの脱却の支援の方法について考察することを目的としました。その支援の原則は、精神科医である小林桜児が(人を信じられない病-信頼障害としてのアディクション-)で提唱する「信頼障害仮説」を参考にしました。対象生徒の家庭・学校で理解を共有しながら、支援し続けたことにより、学校へ復帰を果たすことができました。支援記録を考察した結果、様々な立場の人が連携して、Aとの信頼関係を構築し続けたこと、Aの周辺者の環境調整に努め、受け入れ環境を調整し続けたことが不登校、ネット・ゲーム依存傾向からの脱却へとつながったと結論しました。本実践記録は、2020年10月にネットリスク教育研究誌に上梓しました。

今号のミニ論文紙では、本実践記録の概要をお伝えいたします。

**はじめに****～目的と支援開始前の対象生徒の状況～**

文部科学省の「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」によると、中学校の不登校生徒数は156,006人その内、病気・経済的理由を除いた不登校生徒数は119,687人である。これは在籍数に対して3.6%で、中学生の27人に1人の割合で不登校生徒が存在する。

不登校の原因は決して単一ではなく、「学校の問題」「家庭の問題」「子ども自身の心の問題」など様々な要素が影響を与えている。国立久里浜医療センター院長の樋口氏は不登校やひきこもり、いじめ、家庭内暴力などの子どもに関わる様々な問題の陰にネット依存症が隠れているケースが多いことを述べ、ネット・ゲームの過剰使用から不登校に陥った事例を紹介している。子どもの生活の基盤は、家庭生活と学校生活である。学校生活における生徒指導や学習指導の充実、対人関係能力の育成等が不登校の予防や改善につながると考えられる。樋口氏は依存の問題を考える最も重要なキーワードは「現実逃避」であることを述べ、依存症の背景にはつらさや虚無感などから逃れるための行為が依存につながっていると考えられると指摘している。現実世界の充実が不登校の改善やネット・ゲーム依存の回復に効果的であると考え、教育の臨床を研究フィールドにした先行研

究は、管見の限り見当たらない。

そこで、本稿は、筆者が担当した不登校、ネット・ゲーム依存傾向の生徒が学校に復帰するまでの本人及び家庭への支援の記録をベースに、ネット・ゲーム依存傾向からの脱却の支援の方法について考察することを目的とした。

不登校生徒A(男子)の家族構成は父・母・兄の4人家族である。Aが不登校になった外的要因について、父と母の会話や聞き取りによるとAは中学1年生の冬休みに入る直前に学級内でAとその友人が同じクラスの級友をからかったことを、学級担任から指導を受け、さらに部活動担当者からも指導を受け、冬休み中の部活動に参加しなくなった。その後、冬休みが明けてからも登校することができず、ネット・ゲームにのめりこんでいったという。

Aはネット・ゲーム依存症と診断を受けたわけではない。本人が医療機関を受診していないため、ネット・ゲーム依存症と断定することはできない。しかし、Aのゲーム行動や生活状況をWHOが作成している国際疾病分類第11版(ICD-11)の診断ガイドラインのインターネットゲーム障害診断基準に照らし合わせると、ネット・ゲーム依存傾向であったと言える。昼夜逆転をしてゲームをしている、不登校になっているにも関わらずゲームをやめることができないA本人のゲーム行動や生活状

況、依存傾向に陥った背景を踏まえると、ネット・ゲーム依存傾向と捉えて支援することが必要であると考えた。

## 支援の原則

### 精神科医小林桜児「信頼障害仮説」とは

支援の原則は家庭と学校が連携し、指導の方針を相互に理解を共有しながら対応してきたことであり、その対応の基本方針は信頼関係構築を第一においてきたことである。また、支援の原則の参考として、精神科医の小林桜児の「信頼障害仮説に基づく依存症回復のプロセス」を取り上げた。

小林の信頼障害仮説とは、小林自身の精神科医としての臨床経験から、薬物やアルコール依存に陥った人の成

育歴を丁寧に分析し、本人の意志の弱さやだらしなさではなく、何らかの生きづらさが先行し、それに伴って早い段階から家庭や学校に居場所を失うか、居場所があっても我慢と努力を続けなければ周囲に見捨てられてしまうという不安を抱えることで、やがて他者に頼れなくなり、アルコールや薬物という「物」の薬理効果に頼る方法にしがみつくようになっていくことである。また、薬物・アルコール依存が深刻化する一因として、小児期の逆境体験や様々なストレスから周りの人間への不信感が生まれ、ストレス対処能力が下がり、依存症が重症化することを海外の研究をもとに説明している。小林は依存症の解決のためには受容や共感が基本方針であり、信頼関係構築が第一であると示している。

以下の表は、支援記録の一部である。

時期	様子・記録			
	母親に関する言動・心情等	本人に関する言動・心情等	父親に関する言動・心情等	学校（担任）の対応・関わり
中学 2年 4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校や勉強の話をするとうる陰に扱われる。</li> <li>進級して環境が変われば改善すると思っていた。しかし、あまり良い方向にならなかったから、もうどうしたら良いか分からない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゲーム専用テレビを自分の部屋に移してから昼夜逆転生活を送っている。1日10時間以上はネット・ゲームを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>父との話は反応を示さない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>週に1回程度の家庭訪問を継続し、父・母との雑談からAの生活状況について聞く</li> <li>学校給食を停止する。</li> <li>電話訪問回数：5回</li> <li>家庭訪問回数：4回</li> </ul>
中学 2年 5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>母との会話がだいぶできるようになってきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>朝食を一緒に食べられるようになった。</li> <li>学校のことを話されると機嫌が悪くなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>将来のことを考えて少し悲観的になっている。</li> <li>Aとの関係が改善されない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>電話訪問回数：4回</li> <li>家庭訪問回数：4回</li> </ul>

### 考察(一部)

Aが不登校、ネット・ゲーム依存傾向から脱却できた本実践において、その要因について以下の二点にまとめる。

一点目は信頼関係構築の連携である。Aとの実践についても身近にいる家族からスタートし、学級担任や友人、他教師など信頼感を獲得できるように支援してきた。どの立場でも「受容」と「承認」を基本的な対応方針として、Aとの信頼関係構築を様々な立場の人が連携したことが大きな要因であったと考えられる。また、学級担任がコーディネイト役となり、支援の仕方を常に共通理解

し続けたことが一貫した声がけにつながり、A自身の自己肯定感向上につながったのではないかと考える。

二点目はAの周りの環境調整に努め、受け入れ環境を調整し続けたことである。対象者が学校や社会復帰をするためには、医学的なアプローチに加えて、家族として関わる立場、教育として関わる立場で、対象者が復帰するまでの間接的要因を整えることが大切であると考えられる。本実践においてもAへの直接的なアプローチはもとより、Aがいつでも学校や社会に復帰できるような環境づくりに努め続けてきたことが成果につながったと考えられる。